提言

房州うちわと私（インタビュー要旨）



房州うちわ振興協議会会長　太田（おおた）　美津江（みつえ）

1　房州うちわの歴史

これは、うちわ職人であった父から聞いた話なのですが、元々うちわは、江戸で作られていたものなのです。お城の周りに、弓矢の矢をつくるための矢竹がたくさん植えてあり、矢に使った残りの部分を使って、作られたのが江戸うちわの始まりです。房州うちわの柄が丸いのも、その流れをくんでいるからです。

江戸時代の始めは、武士の内職として発展していったのですが、ずっと平和でしたので、矢を作る竹は必要がなくなって、どんどん刈り取られてしまい、江戸時代の後期にはもう江戸には材料がなかったそうです。

その頃、房州から江戸に、漆喰壁に使う小舞竹を送っていたのですが、この竹がとてもさきやすい竹だと評判になり、房州の竹が江戸の矢竹の代わりに使われるようになったそうです。そして、だんだん竹そのものを仕入れるのではなく、先をさいた物を仕入れるように変わってきました。さらには、うちわの内職をする人が少なくなり、次第にうちわ屋が房州に移ってくるようになりました。決定的なできごとが関東大震災で、私の父の叔父にあたる人も、この地へ引っ越してきたのです。房州には、元々竹という材料があり、農閑期の農家の方や漁に出られない日の漁師さん等の労働力もありました。

それで、ここ房州はうちわの一大産地になったのですが、問屋さんから依頼された仕事だったので世の中にほとんど認知されていなかったのです。

房州うちわが広く知られるようになったのは、20～30年位前からです。当時の沼田知事が、千葉県の職人さんたちをピックアップして紹介してくれたことがきっかけです。

2　房州うちわの職人として

私はうちわ職人の家に産まれましたが、この仕事にそれほど関心があったわけではありませんでした。私は一度家を出て、戻ってきたのですが、その時、父と母がものすごく忙しそうにしているのです。それでいろいろと手伝いをしていたのです。始めは父に言われたことだけやっていたのですが、だんだん父がやることを先回りして用意できるようになりました。そうすると仕事もうまくまわるようになっていきました。多分、父と相性が良かったんだと思います。しかし、父は私に期待をしていなかったのでしょう。仕事に関して一度も叱られたことがないんです。そしてこの仕事を10年続けると、千葉県から看板がいただけるのです。その時になって、「私はこの家を継ぐのかもしれないな。」という実感がわいてきたのです。なんだか、自然体のまま職人になってしまったという感じです。

うちわ職人としてひとり立ちした時、紙や竹などの仕入れ先や取引先を父からそのまま引継ぎましたので、苦労と感じることはありませんでした。逆に、何か問題が起きたらどうやって解決するか？そういう解決方法を父から聞く機会はありませんでした。しかし、

何かあってもきちんと対応する父の姿勢は見てきているので、多少のことではびくつきません。ダメな時はダメで引く。できる時は前に進む。もうそれしかないんじゃないかと思っています。

うちわづくりがうまくいったときは、すごく嬉しいです。よく「竹はまっすぐだ。」って言われますけれど、それは嘘です。一本一本竹には違いがあり、ひねくれた竹もあれば、曲がった竹もあります。そんな性格の違う竹たちをどうやって一人前のうちわにするか、それが苦労でもありやりがいでもあります。手のかかった竹がうちわになってくれ、それをお客さんが手に取ってくれて、購入してくれた時が何より嬉しいです。素直にできたうちわより、「どうしよう、一応ものにしなければ。」と作ったうちわの方が可愛いんです。

3　房州うちわの未来に向けて

現在、房州うちわをやっているのは三軒で、うちわだけで生計を立てているのは、私の所の一軒です。南房総市と館山市で「房総うちわ振興協議会」を組織し、後継者育成事業を行っています。房州うちわを学びたい人を募集して、それは一回限りではなくて、うちわ屋さんになりたいという方を集めて、技術指導を行っています。やってみて向き不向きはありますので、初めて刃物を持って、手を切って辞めてしまう方もいますが、１年足らずでうちわまで作れるようになる方もいます。

私たちはそのお手伝いをしています。もう現役は少ないですが、この事業の参加者に指導しています。そこで育った人たちが今、指導の補助で入ってくれています。自分で苦労して身に付けた技術ですから、それを新しく始める人たちに口頭と手技で教えてあげられるのです。私たち職人は手で覚えているので、口では説明できない部分があるのです。

この事業で育った方たちが、他の仕事をやったり、年金をもらいながらだったりしながら、房州うちわづくりに励んでいらっしゃっていて、自分の作品が売れるくらいまで上達している方が続々と出ています。だから、房州うちわの技術は残っていきます。それに関して私は心配していません。

4　子供たちと関わって

私たちは、子供たち向けに房州うちわの体験教室を開いています。鴨川青少年自然の家等でうちわづくりの体験教室があり、申し込みがあると道具や材料を持って、教えに行きます。

教室では、いろいろな子供たちと出会います。私は、不器用な子はいないと思っていますので、自分は不器用なんだというお子さんには、「不器用だと思っている人ほど仕事が丁寧だよ。」と言ってあげるんです。引いた線通りに紙が切れなくても、端が欠けてしまっても、「あら個性的。」「あなたの個性でここまで仕上げたのだからえらい。」って言ってあげるんです。「興味があること。」これが大切だと思います。

5　おわりに

子供たちの様子を見ていると、今の先生は大変だと思います。先生が怒りにくい状況にあるように感じます。親も今はなかなか怒らないですよね。でも、社会に出たら絶対に怒られる場面に出会います。怒られる経験は小さい時期ほど傷は小さいのです。怒るべきところは怒るべきです。そして、教わる立場、教える立場と立場に違いがあることを、親はしっかり教えるべきだと思います。